

## 資料: 仏教者と裁判員制度－浄土真宗本願寺派からの視点

### 資料1「仏教者からの発言」

#### ① 福島貴和住職（長野県善光寺・玄証院）

「裁判員には人を裁くつらさがふりかかる」

「人の心を乱す悪い制度を国民に押しつけるべきではない」

「宗教者は人を裁かないで済む世の中にするのが役目。人を裁くことなどできない」

#### ② 玄侑宗久氏（作家・臨済宗福聚寺住職）

「仏教も神道も、罪人を裁くことには関心を持たない。市民の「人を裁きたくない」という感情は、日本人のなかに残った最後の美德なのだ。仏教でも最高罰は破門だが、たとえ教団追放になっても、別の世界で生きていける。百姓一揆が為政者には「罪」でも、民衆にとってはヒーローであり、両者が共存する社会には深みがある。」

「仏教や神道では、人は人を裁ける存在ではない。市民も一緒に裁くことで、法と世間が合体し、裁判にケチがつけられなくなるのは怖いことだ」

#### ③ 古河良皓（日蓮宗新聞・論説委員）

このように前向きとは言えない調査結果や問題点も多々ある裁判員制度だが、仏教界でもさまざまな議論が起こっている。例えば、人々の救済をめざす宗教の立場と人を裁くことは両立するかどうかという点である。教誨師として活躍する僧侶は、刑務所で受刑者に対して過ちを悔い改め、教えを導いているのである。だが裁判員法では、「人を裁きたくない」というだけでは辞退の理由にならないとされる。

また、死刑の選択もあり得る裁判に、宗教者が裁判員として参加することにも議論が生じよう。仮に死刑に反対する宗教的信念を持つ人が選任された場合、その事由での辞退はできないのである。一部の伝統教団では死刑制度に反対の見解を出しているが、本宗はこれに関する統一見解は未だみられず、個人の判断に委ねられている。

仏陀釈尊は不殺生の教えをお説きになり、法華経の常不軽菩薩品にはすべての人々はみな仏となるべき尊い存在であり、それが故に人々を敬い礼拝すべきことが説かれている。日蓮聖人は、「小罪なれども、懺悔せざれば悪道をまぬかれず。大逆なれども、懺悔すれば罪きへぬ」（『光日房御書』）と、懺悔と滅罪について記されている。

我々日蓮宗徒は人を裁くことや死刑制度について、また現代社会における滅罪をどのように考え、裁判員に選任された場合にはどう対応すべきであろうか。刑事裁判への国民参加の伝統が長い欧米の一部の国では、法律で聖職者は参加できない定めがあるという。わが国でも宗教者は裁判員としてではなく、受刑者に対する教誨や犯罪をした人への更生保護にもっと力を注ぐべきだと考えるのだが…。

#### ④ 季平博昭氏（浄土真宗本願寺派・中央基幹運動推進相談員）

今のところ宗派としての見解を出す予定はないが、季平博昭中央基幹運動推進相談員は「念仏者として、被告の更生を目指した量刑を判断すればいいのではないかと考える。」

#### ⑤ 尾畑文正（真宗大谷派・同朋大学教授）

「昨年、門徒から「裁判員候補になりました。どうしたらいいでしょうか」と明かされ、戸惑った」

「浄土真宗の宗祖・親鸞には「何が善であり、何が悪であるか、どちらも私には分からない」という言葉がある。「親鸞聖人は、人間は自分中心にしか善悪の判断をできないものだ」と説き、自分の感性や価値観を絶対化することを批判している。裁判員制度は人の感性を『善』として市民感覚を大切にしているが、むやみな報復につながるだけではないか」

## 資料2「仏教者からの発言－宗門内－」

『宗報』2009年3月号：宗門内発刊、毎月一冊、全寺院送付

「いわゆる裁判員制度をめぐる問題について」根來泰周監正局長

「本年一月十一日付け読売新聞朝刊〔東京版〕一面トップ記事として「裁判員 悩む宗教界」という見出しで、本年五月に施行される、いわゆる裁判員制度と向き合う宗教界の苦悩が報じられていた。」

「裁判員制度の取り扱う事件の詳細を述べる余裕はないが、概して申せば「死刑又は無期懲役に当たる罪」であることに鑑みれば、もし宗教的心情として死刑制度ないしは死刑の宣言・執行について反対の立場をとられる方が裁判員に任命され、具体的事件の量刑として「死刑」の選択がなされるべき事案を担当されたとき、いかなる対応をすべきであろうか。古来から論じられてきた宗教の「聖」と「俗」との衝突の具体的問題ととらえる見方もあろう。」

「当然のことながら念仏者としての基本理念を反芻しながら、かつそのみに拘泥されない現実に向きあった、個々人の思想と良心をもってする判断が求められよう。宗派としても画一的立場を鮮明にするのではなく念仏者の立場を念頭に、各個人の思想信条により適正な判断を求めるといふほかはなかろう。厳罰を期待する被害者の思いを捨象して一律見解を示すのも問題であろう。」

## 資料3「学生アンケート調査」

<対象>中央仏教学院学生：仏教、浄土真宗を学ぶ専修学校、90名（内、処理済33名）

<調査日>2010.10

<調査方法>裁判員制度について情報を全く与えず、以下の設問に回答。

### ◆質問について

（ 代 男・女）

①裁判員制度について知っていますか？

- a 制度の内容をよく知っている    b 内容をまあまあ知っている  
c 名前は知っている    d ほとんど知らない    e まったく知らない

②あなたは、裁判員をしてみたいですか？

- a したい    b 時間があればしたい    c したくない

③その理由は何ですか？

（ )

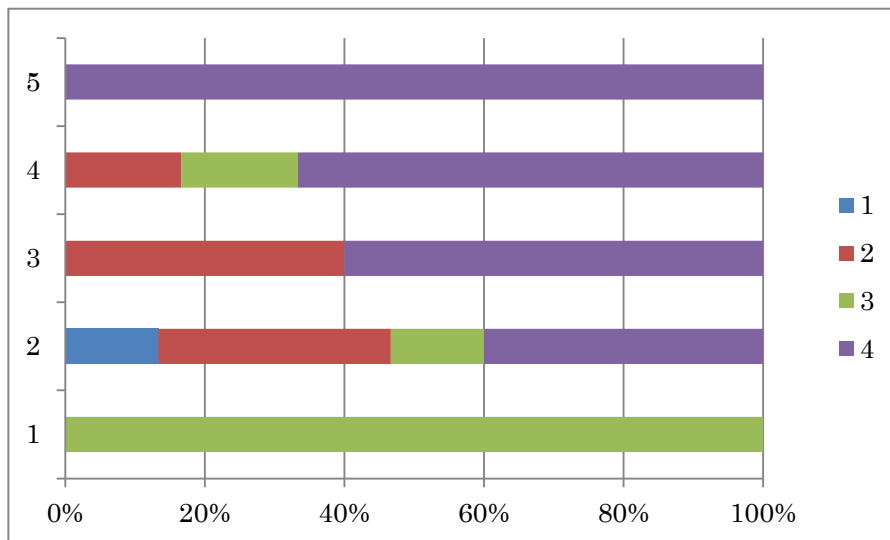
④裁判員制度は信教の自由を侵害すると思いますか？

- a する    b する可能性がある    c しない    d わからない

<年齢構成について>

10代	1					1
20代		10	9	5	1	25
30代		3	1	1		5
40代		2				2
総計	1	15	10	6	1	33

<①④について>



縦軸 1-5 : ①裁判員制度についての認知 1 が a に相当。

横軸 0-100 : ④裁判員制度と信教の自由 1 が a に相当。

<③の記述について>

- ・ 90 名中に、宗教的な理由を直接挙げて意見を示した例はない。
- ・ 「裁けない」という記述が 7 名。
- ・ 「時間がない」「めんどろ」という記述が 5 名。
- ・ 「責任が重い」「専門家がするべき」という記述が 6 名。

※記述部分については、アンケート全体を確認。

宗教的な理由は同様に見られない。

国民としての義務という回答が一例。

**資料4「親族の木陰」(『増一阿含経』巻二六)**

是時世尊聞此語已、即往逆流離王。便在一枯樹下無有枝葉、於中結加趺坐。是時流離王遙見世尊在樹下坐、即下車至世尊所、頭面禮足、在一面立。

この時、世尊この語を聞きおわりて、即ち往きて流離王を逆えたまえり。便ち、一枯樹の下の枝葉有ること無きに、中に於いて結跏趺坐したまえり。

この時、流離王は、遙かに世尊の樹下に在りて坐したまえるを見、即ち車を下りて世尊の所に至り、頭面に

て足を礼し、一面に在りて立てり。

爾時流離王白世尊言、「更有好樹、枝葉繁茂、尼拘留之等。何故此枯樹下坐」  
世尊告曰、「親族之蔭、故勝外人」

その時、流離王、世尊に白して言さく、「更に好樹の枝葉繁茂せる、尼拘留の等有り。何なる故にてか、この枯樹の下に坐したまえる」と。

世尊告げて曰わく、「親族のかげの故に外の人に勝れたり」と。

(大正蔵 3, 690a13-693c9)

## 資料5「サフラン革命」

「上座仏教の僧侶はしかし、政治と関わってはいけないことが原則となっている。俗界の欲望と縁を切って出家した存在である以上、その俗界の権力を構成する政治と関わることは、出家者の本分に反するからである。・・・在家信徒を保護するという理由に基づき、僧侶たちは政治に関わることがある」（根本敬「ビルマの仏教と政治」、『ビルマ仏教徒 民主化蜂起の背景と弾圧の記録－軍事政権下の非暴力抵抗』22 ページ）

「僧侶たちは、通常は政治的活動は行わず、僧院で自己の救済を求めて厳しい修行に専念する出家者である。デモにおいても、政治的スローガンは叫ばず、軍政への「慈愛」を強調した読経を行いながら行進を続けた」（同上、16 ページ）

## 資料6「サンガと国家」

「国法は国家の統制を可能にするための大権の規定であって、これを犯すものには、死刑をも含めて軽重さまざまの処罰をもって人民に臨む。しかし、サンガは、自発的意志の参加者のみによる任意の集団であるから、その処罰に報復的な意図はなく、また懲罰的意図も少なく、狙いとするところは悔悛であり匡正であったから、生命刑である死刑や、自由刑である懲役のような刑罰的処置はまったく置かれていない。そこにあるものはもっとも重いものが、サンガからの追放刑（墮罪）であり、以下、程度の差はあれ懺悔によって滅罪に努めるべき幾檀家かの「悔悛罪」とも呼ぶべき罪過の規定があるわけである。・・・理念と方法の違いはあっても、整然たるこの法律（戒律）の制定は、仏教教国の自立・自治の明白な態度表明であった。邪悪な行為を犯すものがあれば、あえて国家の処断をまつことはない。それはすべてサンガの内部で解決する。これが戒律の精神であったと考えてよいだろう」（金岡秀友『仏教の国家観』82-83 ページ）

## 資料7「親鸞聖人の立場」

『歎異抄』一三条

またあるとき聖人が、「唯円房はわたしのいうことを信じるか」と仰せになりました。そこで、「はい、信じます」と申しあげると、「それでは、わたしがいうことに背かないか」と、重ねて仰せになったので、つつしんでお受けすることを申しあげました。すると聖人は、「まず、人を千人殺してくれないか。そうすれば往生はたしかなものになるだろう」と仰せになったのです。そのとき、「聖人の仰せではありますが、わたしのようなものには一人として殺すことなどできるとは思えません」と申しあげたところ、「それでは、どうしてこの親鸞のいうことに背かないなどといったのか」と仰せになりました。

続けて、「これでわかるであろう。どんなことでも自分の思い通りになるのなら、浄土に往生するために千人の人を殺せとわたしがいったときには、すぐに殺すことができるはずだ。けれども、思い通りに殺すことのできる縁がないから、一人も殺さないだけなのである。自分の心が善いから殺さないわけではない。また、殺

すつもりがなくても、百人あるいは千人の人を殺すこともあるだろう」と仰せになったのです。

また聖人は、「海や河で網を引き、釣りをして暮しを立てる人も、野や山で獣を狩り、鳥を捕えて生活する人も、商売をし、田畑を耕して日々を送る人も、すべての人はみな同じことだ」と仰せになり、そして「人はだれでも、しかるべき縁がはたらけば、どのような行いもするものである」と仰せになったのです。

「さるべき業縁のもよほさば、いかなるふるまひもすべし」（『註釈版』844 ページ）

#### 資料8「村上春樹氏インタビュー」

——完成した作品は、人間の気高さ、怖さを深く考えさせる。善悪とは、人を裁くとはどういうことか。裁判員制度が始まり、皆が再考中の時期でもある。

M オウム事件は現代社会における「倫理」とは何かという、大きな問題をわれわれに突きつけた。オウムにかかわることは、両サイドの視点から現代の状況を洗い直すことでもあった。絶対に正しい意見、行動はこれだと、社会的倫理を一面的にとらえるのが非常に困難な時代だ。

罪を犯す人と犯さない人とを隔てる壁は我々が考えているより薄い。仮説の中に現実があり、現実の中に仮説がある。体制の中に反体制があり、反体制の中に体制がある。そのような現代社会のシステム全体を小説にしたかった。ほぼすべての登場人物に名前を付け、一人ずつできるだけ丁寧に造形した。その誰が我々自身であってもおかしくないように。